



特集 東京2020オリンピック・パラリンピックを
契機とした地域活性化

やまなし

自治の風

Yamanashi JICHI no KAZE
Vol.43 March.2018

contents

.....
巻頭随想
市町村リレー まちづくり夢づくり
苦言提言
地域シンクタンク
市町村の元気印



machijim^{an}

EVENT SCHEDULE

9/23(日) • カウントダウンイベント100日前

12月(予定) • リレーフォーラム2018

12/20~12/31 • スタート直前ウィーク フェスティバル

12/31~平成31年1/1 • 前夜祭・オープニングイベント

お問い合わせ先

甲府市役所 開府500年企画課
〒400-8585 甲府市丸の内一丁目18番1号
TEL 055-237-5321 FAX 055-220-6938

シリーズ
ま・ち・自・慢



Kofu-City

甲府市

甲府市は、2019年に開府500年を迎えます

VOL.43 March. 2018 machijiman

武田信玄公の父、信虎公が躑躅ヶ崎^{つじがさき}

の地（現在の武田神社周辺）に館を構え、大規模な城下町の整備に着手した

ことで、甲斐の府中として「甲府」が誕生したのが1519年。甲府は、2019年に開府500年を迎えます。

「甲府」の重層的で多様な歴史・伝統・文化を再認識するとともに、未来に向けた新たなまちづくりへと繋げるため、現在、「こうふ開府500年記念事業」を実施しています。

今年の9月23日（日）には「カウントダウンイベント100日前」を開催します。2019年1月1日の開幕まで100日となるこの日には、100日前を100年前になぞらえ、明治・大正時代の雰囲気を出したイベントや、市民参加のパレードを行い、機運を高めます。

また、甲府市に関わりの深い事象をリレー形式で学んでいくリレーフォーラム2018は12月の開催を予定しており、近世・江戸時代をテーマに実施します。そして、いよいよ12月31日の前夜祭から年越しで開府500年の開幕をお祝いするイベントを開催します。2019年には様々な記念事業を通常で実施していきますので、皆様、開府500年記念事業にお越しください。

やまなし

自治の風

Yamanashi JICHI no KAZE

Vol.43 March.2018

Contents

Yamanashi JICHI no KAZE Vol.43 March.2018

まち自慢

甲府市

02 巻頭随想

心地よく健やかに暮らせるためにみんなでつくる鳴沢村
鳴沢村長 小林 優

04 市町村リレー 南部町

08 苦言提言

“人”を中心に据えた地方創生を

山梨大学地域未来創造センターCOC+部門 COC+推進コーディネーター/特任教授
山梨県立大学理事 佐藤 文昭

09 特集「東京2020オリンピック・パラリンピックを契機とした地域活性化」

20 講演録

24 ICTの推進

26 地域シンクタンク

28 市町村の元気印

30 自治 Q & A

33 市町村調査研究事業

36 がんばっていま～す。

38 はつらつ!!市町村職員

40 市町村振興協会たより

時の人

編集後記



■表紙写真
すももの郷

写真は、南アルプス市落合地区のすももの人工授粉の様子です。南アルプス市はすもも栽培が盛んで、その歴史は古く江戸時代から行われているそうです。平成24年には、南アルプス市で栽培されている「貴陽」が世界一重いすももとしてギネス世界記録に認定されました。

【南アルプス市提供】

心地よく健やかに暮らせるために みんなでつくる鳴沢村

小林 優 鳴沢村長



小林 優 (鳴沢村長)

PROFILE

昭和22年3月4日生まれ(70歳)
昭和49年6月24日 ㈱小林林業土木役員就任
平成17年4月30日 鳴沢村議会議員就任
平成20年2月20日 鳴沢村長就任
3期目の村政を担う

鳴沢集落上空からの富士山

鳴沢村は、平成25年に世界文化遺産として登録された「富士山」の北側に位置し、集落の東、北、西側を富士河口湖町と接し集落の富士山側では、東に富士吉田市、西に静岡県富士宮市と接する、標高900mから980mに鳴沢と大田和の2つの集落で構成する高原の村です。また、集落の南側には、鳴沢村「字富士山」が広がり、赤松や唐松を主体とした地区には、約460haの別荘地に約三千棟の別荘や保養所等が点在し、この「字富士山」は、富士山頂まで続いています。夏の観光シーズンには、鳴沢村の人口を超える大勢の方が高原でのスロースライフを楽しんでいます。

鳴沢村は、富士五湖地方の、ほぼ中央に位置し集落を東西に走る国道139号線によりゴールデン・ウィークから11月上旬の紅葉シーズンまで大勢の観光客で賑わいます。最盛期の7月・8月には、「なるさわ収穫祭」、「ブルーベリー祭り」などのイベントを開催し、道の駅「なるさわ」で

販売されるキャベツ、スイートコーン、ブルーベリーなどの新鮮野菜を求める県内外の観光客により活気に溢れております。

鳴沢村の平成29年12月1日現在の人口は、3,162人で平成24年をピークに最近では、若干の減少傾向となっております。少子化が進行する中で転入者による社会増により人口減少は小幅に留まっていますが、人口減少対策は鳴沢村が抱える課題の一つと捉え平成二十七年に策定しました、「鳴沢村まち、ひと、しごと創生人口ビジョン・総合戦略」のアンケートに於いて、医療施設の充実を望む声が多く聞かれました。これを受け平成28年度に開業医の募集を行った結果、昨年10月に無医村だった鳴沢村にクリニックを誘致することができました。このことは、村民にとって身近な村内で医療を受診できる安心感の向上に繋がります。今後は、着実に到来する高齢化社会を見据えた訪問診療などにクリニックと連携し積極的に取

り組む必要があります。

鳴沢村に春を告げる花として、4月下旬には、道の駅なるさわ周辺で自生した約二千株の「ミツバツツジ」が開花し、ゴールデン・ウィーク前半には、大勢の観光客が観賞や撮影に訪れます。この期間には、道の駅で「ミツバツツジ祭り」も開催され甘酒の無料配布を行っております。



道の駅なるさわの「ミツバツツジ群落」

おりますが起点と終点が離れており、不便を感じている利用者のためのコースとして、現在、道の駅を起点・終点に山梨県で唯一の特別天然記念物「鳴沢溶岩樹型」、裏山をご神体とし本殿を持たない「魔王天神社」、富士山眺望ポイントの「足和田山」、西湖、精進湖が眺望できる「三湖台」、三百六十度のパノラマが広がる「紅葉台」を歩くルートの整備を進めています。所要時間も約三時間で、気軽に周遊できるコース設定になっており道の駅の更なる活性化に繋がるものと見込んでおります。

昨年11月18日に山梨県町村会と山梨大学が協働した地域の農業、食、環境、経済の問題解決と若者の定着促進により持続的に繁栄する地域社会の構築を目的とする連携リレーシンポジウムが開催されました。四班に分かれた山梨大学の学生14人が5月から道の駅をメインに村内の観光施設に於いてアンケート調査などを実施し、学生目線による課題と課題解決に向けた提案を行う発表会を行いました。地域で生まれ育った私たちとは、違った目線で課題を抽出している事に感心させられました。

今後も引き続き、学生による村の魅力を再発見していただくべく山梨大学との連携を推進し、鳴沢村の課題克服に向けた取り組みを実演していく必要があります。

鳴沢村には、伝統野菜の一つであり、鳴沢村が原産とされる地菜の「鳴沢菜」が江戸時代から富士北麓地域で広く盛んに栽培され、長く厳しい冬の貯蔵野菜として活用されました。近年では、野沢菜などのアブラ菜科との近親交配が進み品質の低下が見られるようになり、平成17年に産官学共同研究により優良系統の選抜を行い、根が太く



鳴沢菜の収穫と富士山

葉がしゃきしゃきしているなど、本来の性質を持ち合わせた系統の育成に成功しました。また、昨年には、鳴沢村農業協同組合が中心になり長年培われた伝統的な生産方法や気候・風土・土壌などの生産地の特性が、品質などの特性に結びついている産品の名称を知的財産として登録し、保護する地理的表示（GI）保護制度の登録に向けた申請を農林水産省へ行っています。

今後の施策としては、平成二十七年度に策定しました、「鳴沢村まち、ひと、しごと創生人口ビジョン・総合戦略」及び平成二十八年度に策定しました「鳴沢村長期総合計画」で掲げた施策を最優先に、福祉、教育、商工観光、産業など、それぞれの分野において地域振興に繋がる事業を展開し、村の目指す将来像「心地よく健やかに暮らせるためにみんなでつくる鳴沢村」の実現に向けて、村づくりに鋭意取り組んでおります。

集落の北側には、ハイキングコースとして人気の高い東海自然歩道が大田和地区から足和田山山頂を通り、紅葉台へ降りるルートが人気となっております。

市町村リレー

まちづくり 夢づくり

南部町 40

MACHIZUKURI
YUMEZUKURI

南部町の紹介

南部町は、山梨県の最南端に位置し、総面積は200・87平方キロメートルあり、県土の約4・5パーセントを占めています。北側は身延町、東・南・西側の三方は静岡県（富士宮市、静岡市）

に接した県境の町です。周囲には緑豊かな山々が連なり、その山あいには源を発した清水は、戸栗川、船山川、中村川、佐野川、楮根川、富士川、万沢川となつて町の中央を貫流する日本三大急流の一つ富士川に注いでいます。また、これらの河川に沿って集落が点在し、中

山間地特有の景観を形成しています。気候は、年平均気温が15度と比較的温暖で、年間降水量は2,500ミリメートル前後と山梨県内では最多雨地帯であり、降雪は極めて少なく、四季を通じて過ごしやすい太平洋沿岸気候に属しています。

水と緑が溢れるふれあい豊かな町



南部町万沢地区からの田と富士山



南部三郎光行公の肖像画

本町は盛岡藩南部家の発祥の地で、南部氏の名称の由来は、鎌倉時代に甲斐源氏加賀美遠光の三男、三郎光行がこの地を与えられ、南部氏と称したことに始まります。源頼朝の奥州遠征を機に奥州に移り、糖部^{めがのべ}の地を与えられ、後の南部藩の礎を築きました。

近世、現在の南部町は、巨摩郡（八代郡）河内領に属していました。明治時代当初は、旧南部町の区域が11村、旧富沢町の区域が3村、あわせて14村に分かれていましたが、いわゆる「明治の大合併」を経て、明治22年時点で、睦合村、栄村、富河村、万沢村の4村となりました。その後、いわゆる「昭和の大合併」により、昭和30年に旧南部町と旧富沢町が誕生しました。平成に入り、「平成の大合併」により県下市町村合併の第1号として、平成15年3月、旧南部町と旧富沢町が合併し「南部町」が誕生し、現在の体制となりました。

交通は、国道52号、県道富士川身延線、JR身延線など山梨県と静岡県を結ぶ主要幹線が町内を貫いており、静岡県から山梨県にアクセスする際の南の玄関口となります。また、新東名高速道路の新清水ICから町内に至るまでは車でおよそ10分程度と新東名又は東名高速道路へのアクセスは、非常に良い環境となっております。さらに現在建設中の中部横断自動車道の開通は、交通のアクセス環境の向上は基より、本町にとって地域の活性化等、様々な効果が期待されます。

「つながる中部横断自動車道」に期待

中部横断自動車道は、静岡県から山梨県を経由し、長野県に至る高速道路であり、新東名高速道路と中央自動車道を結び、さらに上信越自動車道と接続することで、産業、観光の活性化など様々な効果が期待されます。

まず、産業面に於いては、中部横断自動車道の整備により、国際拠点港湾に指定される清水港を活用した交易が可能となり、地域特産品等の海外への販路拡大等、物流の活性化が期待できます。また、新東名と中央自動車道が

接続されることにより、首都圏又は中京地域への二系統の自動車道を使い分け出来る輸送の効率化、又は、非常時でも代替え道路として安定した交通を確保できるため、新規企業の進出にも大いに期待されることです。

次に観光面ですが、日帰り又は週末を利用した観光圏域の拡大が考えられます。東は首都圏の方は基より関東全域に至り、西は中京地区をはじめ近畿地方に至る地域まで拡大され、観光客の更なる増加にも期待がされる場所です。

その他にも、救急医療活動に於いては、本町から県内又は静岡県内への第3次医療施設への搬送時間が短縮され、搬送可能な圏域が拡大することによる緊急時の生存率の向上が見込まれる等、町民が生活する上で欠かすことのできない安心感を与えてくれます。また、災害時等に於いても、国道及び県道の雨量規制によりこれまで迂回路がないため、町内全域が孤立してしまう状況でしたが、自動車道の開通により孤立化を回避する「命の道」として役割を発揮することでしょう。

このように中部横断自動車道の開通は、本町にとって産業・経済の活性化を招くとともに、隣接する静岡市を一層近づけ、静岡市・富士市・富士宮市、そして本町が一体となった都市圏の形成につながれると思います。



(左)中部横断自動車道南部IC(中央)道の駅なんぶ(右)企業誘致場所

道の駅なんぶ

中部横断自動車道の開通を見据え、南部町中野地区の南部ICに、「道の駅なんぶ」を現在建設しています。

中部横断自動車道や国道52号の利用者が立ち寄り、休憩する場を提供するという従来の道の駅としての利用に加え、町民が自ら行う多様なまちづくり活動を行う町の交流の場としての機能を重ね合わせた施設とします。

そのため、例えば週末は来訪者を呼び込んでのイベント開催、平日は町民主体のまちづくりイベントの開催といったように、常に本施設で何らかの交流やまちづくり活動が行われている施設を目指します。また、これらを通じ、町の内外を問わず多彩な交流や情報の受発信が行われ、その結果として、まちの活性化や地域振興に繋がっていくという、おもてなしとまちづくり活動の拠点施設を目指します。

さらに本施設は、南部ICと国道52号の両方に隣接しているため、災害発生時には、中部横断自動車道および国道52号を走行中の自動車が一時的避難できる避難場所、また、非常用物資受入庫を備えているため、大規模災害時等の国道52号通行規制時の救援拠点としても機能する施設とします。

本町では、「道の駅なんぶ」が長く愛され、利用し続けられる施設となるよう



道の駅なんぶ 完成イメージ

に、強力な管理運営体制を官民一体となつて構築し、「道の駅なんぶ」の取組みが町の活性化、地方創生へ波及していくよう、その展開を促進していきます。オープンは、平成30年初夏を予定しており、現在その最終的な準備を行っております。

企業誘致

中部横断自動車道の開通により、山梨県へのアクセス環境が向上することを契機に、企業立地の促進さらには、雇用機会の創出拡大が図られ、町の活性化に波及することが期待されます。

本町では、中部横断自動車道のもたら

す効果を最大限に引き出すため、同自動車道南部IC前に、約27,000㎡の土地を買収し、企業誘致のため昨年度から今年度にかけて整備しました。その結果すでに、数社からの問い合わせ、現地への視察等もあり、ぜひこの機会を活かしたいと思います。また、ソフト面では企業立地を支援する制度として、「過疎対策のための固定資産税の免除に関する条例」、「地域経済牽引事業促進区域における固定資産税の課税免除に関する条例」、「工場立地法地域準則条例」、「産業立地事業費助成金交付要綱」を制定し、企業の誘致に尽力しています。

移住・定住施策

本町の人口減少と少子高齢化の要因は、若者世代を中心とした転出による社会減と子供を産み育てることが期待される年齢層の縮小による出生数の減少と考えられ、既に人口規模を維持できているのが現状です。こうした状況を少しでも改善するために、本町では静岡県境という地理的特性を考慮し、静岡県の「都市部で仕事、住まいは南部町」といった暮らし方を奨励することにより、周辺都市に居住する本町出身者のU・Iターンや都市住民のIターンによる転入・定住増を目指します。

具体的な施策としては、まず初めに自



(左上)グリーンハイツ富士見(中央)転入世帯の建築が進む富士見台分譲地

然豊かな暮らしを求める若者や子育て層の転入や定住を促すため、県境に隣接する地区内の旧中学校校舎跡地に若者世帯限定の町営住宅「グリーンハイツ富士見」を平成25年度に建築しました。次に、校庭を同じく若者世帯限定の宅地分譲地「富士見台分譲地」として平成28年度に10区画整備しました。分譲地は通常よりも安価な価格で供給するとともに、定住奨励金の導入、地元金融機関等と住宅提携ローン協定を締結し、若者世帯の移住・定住を後押ししています。この結果、分譲地の6区画の契約が成立し、売却したすべての区画で住宅が建設され、内3世帯12名の若者世帯が県外から転入しました。

都市住民の転入を促進する施策としては、地方創生拠点整備交付金を活用して

結びに

老朽し空き施設となっている旧教職員住宅を解体。新たに移住定住のための「お試し住宅」を現在建設しており平成30年4月より運用していきます。

今後も、新たに本町へ「住みたい」と考える人を積極的に受け入れ、本町へ新たな人の流れを構築し、地域コミュニティの活性化を図る移住・定住促進施策を実施していきます。

水と緑が溢れるふれあい豊かな私たちの郷土も、人口の減少と高齢化により、極めて厳しい地方自治の運営を余儀なくされる状況です。中部横断自動車道の開通は、長年の懸念事項だったアクセス状況を改善し、町の活性化を推進していく大きな契機となります。

「道の駅なんぶ」は、その起爆剤として重要な役割を果たすこととなり、また、これまで行った企業誘致場所の整備やお試し住宅の建設といったハード事業を最大限活かすソフト事業を展開し、中部横断自動車道の開通により期待される効果を最大限に引き出していくことが大切です。

中部横断自動車道の開通を控え、将来性に満ちた町だと職員が自負し、前進するための課題を的確に捉え、また改善策を一つ一つ講ずることで、町の活性化を目指していきます。

人々を中心に据えた地方創生を

平 成25年度より、山梨県立大学の「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）、平成27年度から、山梨大学を中心とした「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に携わる中で、様々な自治体の皆さまとご一緒にお仕事をさせて頂きました。

これらの取組で特に中心となるテーマは、「若者の地元定着」です。ところで、若者は、なぜ山梨を離れ都市部に出てしまうのでしょうか。地方には若者が求める仕事がないからでしょうか、都市に魅力があるからでしょうか、果たしてそれだけなのでしょうか。私自身、もはや「若者」ではないので、彼らの気持ちを代弁することは難しいですが、これまで学生と接する中でいくつかのポイントがみえてきました。

一つは、若者は必ずしも山梨から出て行きたいわけではないということです。今年度、大学が行ったアンケート結果でも、回答者の7割が山梨で暮らしたい、またはいつか戻ってきたいと回答しています。一方で、それを遙かに上回る学生が県外に就職しているという現実を考えますと、山梨に居たいからという想いだけでは、住み続けることができないということも事実です。

苦言 提言

Kugen Teigen

佐藤 文昭

fumiaki sato

山梨大学地域未来創造センター COC+部門
COC+推進コーディネーター / 特任教授
山梨県立大学 理事



それでは、学生は明確なビジョンを持って山梨から出て行くつもりでいるのでしょうか。もちろん、将来の夢を実現しようとする積極的な県外を目指す学生もいる一方で、将来自分がやりたいことが見つからず、将来の明確なビジョンが描けないまま思い悩んでいる学生も少なからず見受けられます。

大学の中には、就職支援担当があるのと同様に、自治体には産業振興や雇用創出、地方創生の担当部署があることでしよう。しかし、将来のビジョンが明確に描けない学生に、いきなり地元での就職先や仕事の話をしたところでは、実際のところその心に響かないのではないのでしょうか。自戒の念を込めて、こうした取組の多くは、情報を提供している側が、当の若者が求めているものが何であるかが分からない中で、提供する側の論理で進められているように感じています。

そもそも若者の地元定着が進まない原因が何であるかを知るためには、まずは若者の声に耳を傾け、その中から、それぞれの担当で何ができるのかを考えることが重要です。これは、若者の地元定着に限ったことではなく、地方創生の取組や行政サービス全般に共通することでしょう。従前のように、市民の様々なニーズを部署別に細分化し対応するだけでは、もはや市民が「本当に」求めているものを捉えきれなく

なっているのではないのでしょうか。これからは、市民を一人の人格としてそのニーズの全体像を捉えた上で、個々の施策事業が何をしなければならぬかを考えることが極めて重要だと思います。

例えば、就職を機に県外に流出してしまう若者がどのような価値観を持ち、どのような情報を元に、いつ、どこで、どのように将来の暮らし方や働き方を決断しているのかを具体的に知ること、これまで見つめることが出来なかった若者の想いに対し気づくことができるでしょう。そして、それが新たな施策や事業に繋がっていくのだと思います。もちろん、すべての若者の声に耳を傾けることは難しいですが、例えば、「ペルソナ」と呼ばれる架空の人物モデルを用いて、それがどんな活動を通じて何を考え、どのように判断しているのかを可視化し共有することも、若者の想いを理解し共感するための手法として有効だと思います。

そして何よりも大切なことは、地域の暮らし働いている私たち一人ひとりが、ここで暮らすことや働くことに魅力や生きがいを感じることでないでしょうか。その姿こそが、若者にとっての未来の希望であり、何にも優る施策だと思っています。